

平成26年度

清水町いきいきふるさとづくり 寄附報告書



心の中に残る皆様のふるさとへの思い…

ふるさとからの便り



北海道清水町

初夏の候、町民の皆様、そして本町のまちづくりに関心をお持ちいただき、ふるさと納税によりご寄附をいただいた方々におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げますとともに感謝申し上げます。

例年になく早い桜の開花から春先は暑い日が続き、雨が不足している状態が続いております。しかし、この夏は涼しい夏になるのではとの予想もあり、農作物への影響を懸念しておりますが、十勝の自然の恵みをいっばいに蓄えて、豊穰の秋を迎えたいと願っております。

平成22年に町民有志のまちを愛する力が結集して誕生した「十勝清水牛玉ステーキ丼」は、我がまちの新しい名物として大きな存在に成長しました。昨年7月に美瑛町で開催された新・ご当地グルメグランプリ北海道 in 美瑛において、前年に続きたくさんのご来場者から支持を獲得し、2連覇を達成しました。各地から清水町を訪れていただいた皆様に、食と自然・風土を体感していただきながら、この町の魅力を実感していただけるものと認識しております。

さて、去年は町政においては、町民の安全と安心を守るため、保育所や小・中学校の教育施設等や、公衆浴場・清掃センター等の生活に欠かせない施設の改修や設備更新、消防の高機能指令センター整備と防災情報配信システム整備に取り組みました。また、子ども子育て支援システムの取り組みやしみず赤ちゃん絵本購入事業、小学校低学年英語活動事業にも取り組み、子育て環境の充実や、福祉におけるまちづくりを進めさせていただきました。

本年も、まちづくり基本計画の「みんなで生き生き 豊かさ育むまち とからしみず」に基づき各種施策を進めさせていただく所存であります。皆様方から寄せられました「いきいきふるさとづくり寄附」のふるさと納税により、特徴のある事業に活用させていただき、個性豊かな活力あるまちづくりに邁進してまいります。

平成26年度におきまして、皆様からいただいた寄附をここにご報告させていただきます。

あらためて皆様のご支援、ご厚情に心より感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝とご多幸を祈念し、お礼のご挨拶といたします。

平成27年6月

清水町長 高薄 渡



平成26年度 清水町の主な話題（広報しみずより）



4月22日、「しみず赤ちゃん絵本贈呈式」が保健福祉センターで行われました。

7～8月カ月児相談で訪れていた親子9組に、それぞれ3冊の絵本がプレゼントされました。その内1冊は「十勝清水食育ネットワークおむすび会」が制作した町民手作りの絵本で、同会の森田里絵会長は「大きくなって、清水町の大切さを感じてもらえるよう、清水の食材や風景がいっぱい詰まった内容になっています」と伝えながらの贈呈となりました。

5月8日、清水小学校4年生53人が、総合的な学習の作業として「バードハウス(鳥の巣箱)作り」を行いました。

この授業は、東日本高速道路(株)とバードハウスの普及を目指すNPO法人フェザードフレンドとの協働により、環境教育などを目的として実施され、児童は丁寧に釘を打って組み立て、きれいに色を塗って完成させました。作成したバードハウスは、自宅に設置したり、道東道の十勝平原サービスエリアにも設置されます。



6月28日、29日に「第20回全十勝清水やきもの市」が開催されました。

全道各地の窯元47軒が出展し、個性豊かな茶碗や皿、花瓶やコーヒーカップなどが並べられ、多くの来場者がお気に入りの一品を探し求めています。

また、窯元から提供された陶器が当たる抽選会が行われたほか、陶芸体験や地元飲食店による販売、清水高校茶道部と茶道清翠会による野だてコーナーも人気を集めていました。

7月5日、6日、「新・ご当地グルメグランプリ北海道 in 美瑛」が美瑛町で開催されました。

13団体が自慢のご当地メニューを出展する中、牛玉井ブース前には開店時から行列が途切れることなく、お客さんで大盛況でした。

2日間で約4千食を提供した牛玉井は、「人気度部門」1位、「味部門」1位、「コストパフォーマンス部門」2位で、見事総合優勝を果たし、昨年続き2連覇を達成しました。



8月2日、清水町花火大会が清水小学校で開催されました。昨年、町民有志がまちに活気を取り戻そうと実行委員会を設立し、企業や個人からの協賛により開催して、今年で2回目。花火には絶好のコンディションのもと、色とりどりの打ち上げ花火や変わり種花火など、約2千500発の大輪が披露され、フィナーレのスターマインが夜空を彩ると、会場に訪れた大勢の観客から大きな歓声があがりました。

9月19、20日に清水秋祭りが行われました。澄み切った青空の中、大勢の担ぎ手による「みこし」が街中を練り歩きました。イベント会場では、清水町の1年を占う「綱引き」が行われ、清水と御影両地区の代表者で行った結果は、1対1で引き分けでした。また、ステージでは2日間に渡り、小学校ジュニアプラスバンドの演奏やダンスなどが行われたほか、子どもビンゴゲームなどで会場は盛り上がりました。





10月5日、町観光協会主催の第7回清水元気祭りが、ハーモニープラザで開催されました。

会場には町内産の農畜産物やスイーツなどを扱う11店が並び、限定メニューのえびすや菓子舗の「アスパラ円盤焼」や辻屋精肉店の「清水やきとり弁当」には開場とともに長い行列ができた他、「十勝清水牛玉ステーキ丼」と「牛とろ丼」の販売も人気を集め、来場者は清水町産の味覚を存分に楽しんでいました。

11月8日、西部十勝4町の子育て支援センター主催による脱・「イクメン」宣言!! ~忙しいお父さんのための応援講座~が文化センターで開催されました。

芽室町在住の嶋野丈治氏を講師として招き、民間企業勤務時に自ら「育児休暇」を取得し、育児をした時の実体験を基に語り、参加した約30名のお父さん・お母さん達は、子育てにおいてとても重要なパパの役割を、具体例などとともに真剣に聴き入っていました。



12月13日、清水高校第30回合唱祭が文化センター大ホールで開催されました。

クラスごとに課題曲であるベートーヴェンの交響曲第九番「歓喜の歌」と自由曲が披露され、声量やハーモニー技術、発表態度等による審査が行われ、3年A組が金賞、3年B組が銀賞、2年C組が銅賞に輝きました。

また、年次トップ賞は1年D組、指揮者賞は3年B組の坂田硝威さん、伴奏者賞は2年C組の細野史孝さんが選ばれました。

1月17日、18日、前十勝チビッコアイスホッケー御影大会がアイスアリーナで開催されました。

17日に行われた4年生以上のA級では、全7チームにより激闘を繰り広げ、前年度優勝の清水御影アイスホッケー少年団は準決勝で開成アイスホッケークラブに快勝し、決勝では広陽稲田ブルーインズを8対0で破り、連覇を果たしました。

18日には3年生以下のC級が行われ、熱い戦いに歓声が飛んでいました。



2月5日、今春入学する各保育所、幼稚園の年長児がアイスアリーナで交流をしました。

入学を迎える園児たちがスムーズに小学校での生活を送れるように行われているこの交流では、そりりレーで大きな声を出し、応援する園児の姿が見られた他、アイスホッケーを一緒に楽しみ交流を深めました。

同じ小学校に通うことになる園児たちは、友達の輪を広げ楽しい時間を過ごしました。

3月14日、清水ジュニアブラスバンド第21回定期演奏会が文化センター大ホールで開催されました。

メンバーはトランペットやクラリネット、アルトサックスなど、それぞれのパートをしっかりと演奏し、一生懸命練習を積み重ねた成果を発表しました。

また、清水中学校と清水高校の吹奏楽部とともに、いきものがかりの「エール」を卒業生に贈る曲として演奏し、息の合った音色に大きな拍手が送られました。



清水町のあゆみ

北海道十勝平野の西部に位置する清水町 ― 西には季節ごとに彩りを変える『日高山脈』の山々が、東には大雪山系トムラウシ岳から注ぐ『十勝川』が滔々と十勝平野を流れ、山岳と平野を流れる川、そして田園のコントラストが、北海道・十勝ならではの特徴ある景観を形成しています。

清水町の開拓は、第一国立銀行創設者である渋澤栄一子爵が熊牛地区に創設した十勝開墾合資会社によって始められました。明治31年4月に越前地方から入植した26戸99名を皮切りに、熊牛原野と呼ばれたこの地区に順次入植が進められました。その後百十年あまりが経過し、現在は、人口約9,850人、農業産出額約229億円を有する酪農と畑作を基幹産業とした町になっています。

開拓が進むとともに、次第に集落が形成されていき、明治36年には人舞村外一カ村戸長役場が設置されました。明治40年の農家戸数は666戸、1戸あたりの耕地面積は3.89haとなりました。現在と比べると10分の1ほどですが、主にキビや豆類、馬鈴薯、そばなどを生産し、特に当時の主食として消費されていたキビは、当時の村の人口2,220人に対し、2,600人分の食糧に相当する量を生産していたそうです。

清水町の市街地に電灯が灯ったのは大正8年ですが、電力を供給する水力発電所の建設に対し、議会は当初「将来の水田造成に必要な水資源が不足する可能性がある」と反対の意思を示していました。この当時、住民の暮らしにはランプが明かりとして使われ、高い電気代を払ってまで電灯をつけなくても良いという時代でした。その後、大正10年には電話が開通しますが、役場や商工業者など、加入したのはわずか82戸で、一般世帯への普及はかなり後になってからでした。

昭和31年10月1日、御影村との合併により、3,079世帯、17,945人の「新」清水町が誕生しました。町村合併促進法は、人口8,000人未満の町村の行政の効率を高め、財政力を豊かにし、住民福祉の向上を図ることを目的に合併を進め、全国の1万近い自治体を3分の1に減らそうというものでした。当時人口は5,335人、戸数856戸の御影村はその対象となっており、「北海道町村合併促進審議会」などにより、御影村は清水町との合併を第1案として提示されていました。しかし、大正10年に芽室から分村した御影村は、清水町とは歴史的、経済的つながりは薄く、御影村民は合併反対派が多数を占めていました。十勝支庁の合併勧告、指導もあり様々な障壁を乗り越えての合併でした。

合併後の昭和30～40年代は、日本全体が高度成長の黎明期でもあり、住民の暮らしも便利で快適な様々な整備が進み、豊かさを実感できる基盤が整い始めた時期です。清水町で



も、道路・橋梁、保育所や学校、公民館などの公共施設の新築改築などを進めました。

昭和 50～60 年代は各小学校の新築や清水町文化センター、日勝スキー場、町民水泳プール、老人福祉センターなどが建設され、現在の清水町の姿が形づくられた時代です。

平成 3 年に策定した「森と水の郷づくり基本構想」は、清水町のもっとも大きな財産である自然を大切にし、森や水を守り育て、自然と人とのかかわり合いを深めながら、活力と潤いのある地域を創造することを基本理念にしています。

平成 18 年 4 月 1 日、清水町の町政運営について基本的な事項を定める「まちづくり基本条例」を施行しました。この条例の施行により「情報の提供と共有」を柱に「町民誰もが参加する協働のまちづくり」を推進し「町民憲章」が掲げる理想のまちをつくることを目標として町政運営を行っています。

また、平成 23 年度から平成 32 年度までを計画期間とした清水町まちづくり計画（第 5 期総合計画）では「みんなで生き生き 豊かさ育むまち とかちしみず」を将来像とし、町民みんなが参加し支え合い、活力と元気にあふれ、健康で安心して暮らせる豊かなまちを目指して、まちづくりを推進しているところであり、平成 26 年は、子育て支援施策の新設、拡充、保健福祉事業の充実に取り組みました。



(早春の日高山脈)

寄附の概況

『清水町いきいきふるさとづくり寄附条例』の制定から7年目となる平成26年度は、29名の方々から総額で2,982,000円の寄附をいただきました。

(1) 第九のまちづくり事業	1件	10,000円
(2) アイスホッケーのまちづくり事業	5件	1,150,000円
(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業	4件	192,000円
(4) 森と水・景観の保全事業	3件	140,000円
(6) 指定なし	17件	1,480,000円
合計	30件	2,982,000円

※一度に複数の事業に対し寄附できるため、人数と件数の合計は一致しません。

また、開始からの累計額は以下のとおりです。

(1) 第九のまちづくり事業	8件	584,000円
(2) アイスホッケーのまちづくり事業	44件	7,455,000円
(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業	19件	1,083,316円
(4) 森と水・景観の保全事業	9件	1,455,000円
(5) 花で彩るまちづくり事業	7件	252,158円
(6) 指定なし	41件	3,793,140円
合計	128件	14,622,614円

なお、平成26年度は、いきいきふるさとづくり基金から180,000円を取り崩し、「しみず赤ちゃん絵本購入事業」に取り組みました。



清水市街



御影市街

寄附者の方々（敬称略・五十音順）

帯広信金清水ブロック	清水支店・御影支店	50,000 円
佐藤 賢一	(神奈川県横浜市)	200,000 円
佐藤 美知雄	(千葉県市川市)	100,000 円
清水 美紀	(東京都町田市)	10,000 円
須賀 洋子	(北海道札幌市)	30,000 円
杉森 四郎	(埼玉県蓮田市)	100,000 円
成山 義弘	(奈良県北葛城郡)	20,000 円
原 幸一郎	(大阪府堺市)	600,000 円
原 周平	(東京都渋谷区)	200,000 円
原 拓平	(東京都渋谷区)	150,000 円
原 正子	(大阪府堺市)	150,000 円
原 有佳里	(大阪府堺市)	50,000 円
牧野 俊信	(北海道釧路市)	300,000 円
宮内 修平	(大阪府吹田市)	100,000 円
寄付者 1		50,000 円
寄付者 2		50,000 円
寄付者 3		50,000 円
寄付者 4		50,000 円
寄付者 5		50,000 円
寄付者 6		50,000 円
寄付者 7		100,000 円
寄付者 8		50,000 円
寄付者 9		10,000 円
寄付者 1 0		100,000 円
寄付者 1 1		50,000 円
寄付者 1 2		62,000 円
寄付者 1 3		100,000 円
寄付者 1 4		50,000 円
寄付者 1 5		100,000 円
合計	29 名	2,982,000 円

※氏名等、個人情報掲載については、本人の了承を得ています。
掲載を望まない方は匿名としています。

清水町いきいきふるさとづくり寄附

清水町の文化芸術活動は、大正時代まで遡り、多くの団体やサークルが多種多様な活動が続けてきましたが、その集大成が、昭和55年の清水町文化センターのこけら落としとして開催された「第九演奏会」と言えるでしょう。町民204人の合唱は、全国に「第九のまちしみず」としてその名が広く知られるようになりました。それ以来、5年ごとに開催されており、また平成14年に開町100年を記念して開催された「第九フェスティバル」では幼稚園から全小・中学校、高校、社会人の参加団体、全員が原語による合唱を行うなど、「文化のまち」をキーワードとしてまちづくりを進めております。



町民の文化に対する情熱とエネルギーは、昭和55年から約30年を経過してもなお連綿と受け継がれ、平成22年12月5日には第7回となる演奏会が開催されました。

本町の特徴的なまちづくりとしてのアイスホッケーは、昭和7年、御影小学校の教師だった加藤光也氏が池をスケートリンクにして、子どもたちに教えたのが始まりといわれています。

昭和13年には御影小学校の先生を集めてアイスホッケーのチームをつくり帯広大会に遠征するまでになりましたが、戦争の時代に入り一時期立ち消えとなりました。昭和24年、加藤先生は御影中学校の校長として赴任し、グラウンドに陸リンクをつくり再びアイスホッケーの活動が始まりました。

平成4年、町村では全国初めての屋内リンク「清水町アイスアリーナ」を建設し、清水高校アイスホッケー部は平成17年インターハイで準優勝、平成20年北海道高等学校アイスホッケー選手権大会で優勝を果たすなど、「アイスホッケーの町清水」を全国に発信しています。



また、まちづくりの基軸のひとつとして「教育」があり、本町は一人ひとりが、いきいきと輝く創造性豊かなまちづくりを推進しています。

次代を担う子どもたちが、健やかで伸び伸びとたくましく生きる力を育む環境を整備するとともに、一人ひとりの町民が心豊かに生きがいを持ち充実した生活を送るための学習環境や活躍の場の拡充に努め、創造性豊かな地域社会の実現を目指した人づくりを進めています。

全国に先駆け平成15年5月に、構造改革特区で「文化のまちの心の教育特区」が認められ、町単費による教員を配置し小学校1～2年生を1学級20人程度の少人数学級を実施しています。

いきいき輝く人づくりを理念とする少人数学級は、個に応じたきめ細やかな指導の充実により子供たちの学ぶ意欲は向上し、集団の中で個性を伸ばし、自分を見つめ直し、感情をコントロールして他者との関係を調整することのできる秩序感覚の育成など様々な教育的効果が成果として上がってきております。

平成18年4月に「しみず教育の四季」を宣言し、厳しくも美しい本町の四季を通じて、家庭、学校、地域が相互に連携し、新しい時代をきり拓く子どもたちを、家庭、学校、地域が「12の窓」から心を合わせて守り育てることによって、教育への関心を高め、それぞれがかかわり、何ができるのかを考えて行動する取り組みを進めています。

これらの本町がこれまで取り組んできた様々な施策について、町民や清水町出身者、本町にゆかりのある方が、寄附という行為によりまちづくりに参画し、寄附者の意向が反映された事業を推進することで、第九演奏会やアイスホッケーをはじめとする特色あるまちづくりを更に進めたいと考えております。

また、ふるさと納税制度が実施されたことにより、寄附条例を制定し、本町の特色を政策メニューで示すことで、寄附の意向を持つ方に対するアピールができ、寄附金は地方交付税の減少など逼迫する財政状況の中、新たな財源としてまちづくりへの展開が図られるものと考えています。

清水町まちづくり計画の位置付けについては、寄附金による事業の実施が町民参加の促進や、健全な財政運営の一助となる視点から、第5編「みんなで創る協働のまちづくり」第1章「町民誰もが参加する協働のまちづくり」の中の施策として「一人ひとりがお互いに尊重し、それぞれの立場で自主的にまちづくりに参加します。(町民)」と記載されております。

また、町内の商店等20箇所のご協力をいただき、寄附された方が協賛店で買い物などの際に特典が受けられる「ふるさと応援会員」事業を行っておりますが、平成26年度には、新たに感謝の意を込めまして本町の魅力のある特産品の贈呈を開始し、平成27年度は更にたくさんの方に特産品をお送りするよう、内容の充実を図っています。

いきいきふるさとづくり寄附では、政策メニューとして5つの事業を掲げておりますが、皆様より寄附を受けるためには、寄附を受けるにふさわしい行政運営が求められるものであり、本町の人材や自然、地域が醸し出す雰囲気など魅力を高める継続的な努力を続け、多くの方が暮らしてみたいと思う清水町づくりを進めたいと思っております。

今後のまちづくりにおいても、それぞれが基軸のひとつとして重要な施策であり、寄附をいただくことによって、寄附者が事業に関わることとなり事業実施者(町民等)との連帯感の醸成を図って行きたいと考えています。



基金を活用して行う事業

積み立てた基金は、寄附者の指定する次の事業に活用されます。



(1) 第九のまちづくり事業

1980年に清水町文化センターのこけら落としとして開催した「第九演奏会」以来、第九を本町のまちづくりの基軸のひとつとして、関連する様々な事業を行っています。

演奏会や合唱祭の開催など、第九に関連する事業に活用します。

●「歓喜」の歌声（清水町史から抜粋）

演奏会は管弦楽が札幌交響楽団、指揮、大町陽一郎の手で行われ、最終楽章の歓喜の大合唱に204人の町民合唱団が参加した。牛飼いの酪農家の主婦から、トラクターを操る若者、平凡な〇しから勤め帰りのサラリーマンまで、「第九を歌いたい」というただその目的だけで集まった団員たちは、難解なドイツ語の歌詞に悪戦苦闘しながら練習を積み重ね、ついに清水町の名を“第九の町”として全国に轟かせた。以来、演奏会は五年に一度開かれ、そのつど集まった団員によって歌い継がれている。（中略）

こうして多くの人々に感動を与えてきた“歓喜の歌声”は一人の男の夢から始まった。その男の名は高橋亮仁という。昭和34年、清水高校の音楽教師だった高橋は三人の卒業生に請われて仲間だけの小さな合唱サークル「せせらぎ合唱団」をつくった。練習を重ね、演奏活動を続けているうちに合唱団はやがて大きく成長、メンバーも町内だけでなく、新得、鹿追、芽室、帯広などに広がっていった。（中略）

メンバーの夢はやがて「自分たちの手でベートーベンの第九番、歓喜の歌を合唱したい」と大きくふくらんだ。当初は人間より牛の方が多いた小さな町で第九を歌う合唱団などできるわけがないと一笑に付されたが、参加を希望する団員が一人、二人と増えるうちに夢は大きく実現に近づいた。

高橋らの熱意に町も全面的に協力、こうして実現したのが「文化センター」のこけら落としでの「第九」公演だった。その栄誉をたたえて昭和56年度の「北海道文化奨励賞」がせせらぎ合唱団に贈られた。



(2) アイスホッケーのまちづくり事業

アイスホッケーによる青少年の育成や異世代の交流は、本町のまちづくりの特徴です。幼児、小中学生、高校生、一般のチームの育成強化や各種大会の開催、出場への支援などに活用します。



(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業

子どもたちが心身ともにいきいきと学び、遊べる環境づくりや、地域全体で育てていく環境づくりを行います。

具体的には、少人数学級の推進、児童図書の充実、放課後子どもプランの実践、地域の見守り活動の支援、子育て支援事業の充実などに活用します。



(4) 森と水・景観の保全事業

日本の食糧基地である十勝・清水町での安全で安心な農業の推進や、本町の森やきれいな水を守る活動を行います。

レクリエーションの森の整備、きれいな水を守る環境の保全、クリーン農業や安全・安心な農業の推進、桜並木や農村風景の維持保存、町内の遺産的価値のあるもの（しみず遺産）の発掘と維持保全などの活用を想定しています。

●森やきれいな水を守る活動

清水町の基幹産業である農業には、きれいな水が欠かせません。また、きれいな水は豊かな森で育まれます。

清水町では、きれいな水や豊かな森を次の世代へ引き継ぐため、環境保全の取り組みを進めています。その一つの「しみずグリーンフェスティバル」では、平成17年からスキー場跡地の原野に森を甦らせるための植樹活動が、町民の皆さんの手によって行われています。



(5) 花で彩るまちづくり事業

町内を花で飾り、来町する方々へのおもてなしの心を表現します。

具体的には、シーニックバイウェイ「十勝平野・山麓ルート」沿線への植栽や、町内各所の花壇の整備、公共空間への植栽などに活用します。

●シーニックバイウェイとは

シーニックバイウェイ(Scenic Byway)とは、景観・シーン(Scene)の形容詞シーニック(Scenic)と、わき道・より道を意味するバイウェイ(Byway)を組み合わせた言葉です。地域と行政が連携し、景観や自然環境に配慮し、地域の魅力を道でつなぎながら個性的な地域、美しい環境づくりを目指す施策です。

(出典：シーニックバイウェイ支援センター <http://www.scenicbyway.jp/>)

現在、清水町を含む「十勝平野・山麓ルート」がルートとして指定されており、沿線の各地域では、住民などの手で花壇の整備や清掃活動など「美しい景観づくり」の活動が行われています。



(十勝平野の春)

〒089-0192

北海道上川郡清水町南4条2丁目2番地

清水町役場企画課統計企画係

TEL 0156-62-2114

FAX 0156-62-5116

e-mail kikaku2@town.shimizu.hokkaido.jp